

ザカートのダイコンストラクション —— 社会連帯・互酬・共同寄託 ——

佐藤秀樹

現代は経済を語るに難しい時代である。ストックからフローへ、そしてバブルと経済学が経済を語るよりもむしろ様々なアプローチが必要となってきた。究極の経済社会でもフィランソロピーと呼ばれる企業から社会への利益還元が行われている。現代社会においても、経済事象の多様化により従来の紋切型の知による分析では全てを捌ききれなくなってきた。

中東世界におけるイスラーム経済を語る際に、西洋の学者の多くはことさらイスラーム世界の特殊性を強調することにより secular なものとして取り扱うか、もしくは自らの枠組みの中で西洋型の経済との相似性を見つけそれを強調してきた。無論イスラーム世界の経済学者の中でも時として西洋型の経済学の枠組みの中でイスラーム経済を語ることが当然であるかの如く受けとめている学者も存在する。イスラーム経済を secular なものとして扱う以上、そこにはエスノセントリズムの顔が見え隠れし、容易にオリエンタリズムの枠組みに組み込まれる危険性を孕んでいる。

イスラーム経済は、従来型の知では語れないほどの多様性を内包している。イスラーム経済における無利子銀行、ザカートなどの多様性は今まで見過されてきたものである。ここ数年の西洋における無利子銀行の研究も、

無利子の形態の特異性にのみ説明の力点が置かれ、その背景にある倫理観、規範、歴史性は無視されてきた。近代経済学の枠組みの中では上記要素は必然的に排除されてしまう。ここに近代経済学の出自の問題として、西洋における市場社会を解明する「道具」として発展してきた学としての限界がある。そしてより特化された経済学の分野では、より実態から離床した姿で本質をとらえることになる。無利子銀行、ザカートにしてもその背景を探ることによりその本来の姿を浮かび上がらせることができる。

バーキルツ=サドルは、無意識の内に社会から離床した経済を社会に埋め戻しイスラーム経済の謎を解いてみせた。カール・ポランニーは、意識的に離床した経済を社会に埋め戻す作業を行った。両者に方法論の差異はあるものの、そのアプローチは傾聴に値する。

イスラーム経済を考察するにあたりザカート、所有権、労働の三極を知らねばならない。この3つの要素は、イスラーム経済における共同体と富を考える上で避けて通れないものである。ザカートは貧者への贈与であり共同体を通して履行される。イスラームにおける所有権とはアッラー(神)に属するものであり、ウンマ(Ummah:ムスリム共同体)を通して履行される。イスラームにおける労働とは、汗して労働することであり、不労所得は望ましくない。富の自己増殖、即ち利子による利得の獲得は望ましくない。この3者がイスラーム経済を考える上で欠くべからざるものである。

本論では、イスラームの五行の1つザカート(Zakāt:喜捨)に光をあてながら近代経済学の枠を乗り越え贈与論、経済人類学によるイスラーム経済の解明を試みる。西洋の経済学者は、ザカートは西洋の富裕税と近似していることから一種の宗教税もしくは富裕税と規定する。同様に、イスラームの無利子銀行が、西洋の市場社会の原則では説明が困難であるが故に特異面が強調され、ザカートは市場社会での徴税システムとの相似点が強調される。ここにフォーマリスト(形式的経済学者)のアプローチの限界を見る。狭義の経済学では「目的」と「手段」のコンテキストで分析する

が故に当然の帰結となる。Formalistic な物の見方ではザカートにおけるイスラームの固有性を簡単に見過してしまう危険性がある。筆者は、ザカートは貧者への gift であるという推論を展開する。

筆者があえて贈与論を援用した訳は、交換を軸にザカートの行為をとらえるのではなく、ザカートの行為を贈与としてとらえることによる。経済学の枠組みの中にイスラーム経済をはめこむのではなく、経済学の枠を外した中でイスラーム経済をとらえようと試みた結果である。これは、サドルとポランニー両者の考察の共通項に結びつくのである。

サブスタンティビスト (実体主義者) は、経済を社会に「埋めこまれた」ものとしてとらえている。ザカートは、その背景にイスラームの倫理を負っている。言い換えるならば、非経済的要因も経済行為を規定している。ポランニー、マルセル・モース、マーシャル・サーリンズらの方法論を援用しながら、ザカートの持つ相互性もしくは互酬性 (reciprocity) および共同寄託の側面を明らかにし、イスラームにおけるザカートの意義を浮き彫りにしたい。

I. 方法論から

本章では、カール・ポランニー、マルセル・モース、マーシャル・サーリンズの3者の方法論を援用しザカートに対する新解釈を試みる。特にザカートを贈与の行為としての位置づけにはモースに負うところ大である。

1. カール・ポランニー

カール・ポランニーは、ウェーバー、デュルケム、マルクスより影響を受け、ホリスティックなアプローチによる比較経済と経済人類学を確立した。日本では、栗本慎一郎の紹介によりやや経済人類学の重要性のみが強

調されているが、ポランニーの卓越した歴史性の読み込みは忘れてはならない。

ポランニーは、「経済行動は、社会的、政治的、宗教的生活に組み込まれたもの」と主張する。このスタンスは、ムスリムの経済行為を研究する際、示唆に富む。従来型の知では、アダム・スミスに端を発したホモ・エコノミカス（経済人）の前提——人間は常に利潤の極大化を目指す——を、イスラーム社会に転用する。しかし、これはイスラーム経済を真に解明するに至らないと筆者は考える。フォーマリストの姿勢は、経済が社会より「離床」した状態でとらえるもので、イスラーム的価値観は経済行為の対象外となる。むしろ積極的にこの価値観を「埋め戻す」ことによって、イスラーム経済、特にザカートの真の意義を追究することが可能となる。

A. 異型としての市場経済

ポランニーは近代経済学の大前提である市場について再解釈を試みたところに、彼の卓見がある。市場経済に必要な不可欠と伝えられてきた貿易、貨幣、市場の3要素について、各々の誕生から発展までを明らかにし、19世紀の資本主義経済の誕生における偶然性を発見する。当時、土地と労働が市場に、単なる生産の要素として組み込まれつつあった。ポランニーは、労働の動機として単に収入の増加のためでなく「飢えへの恐怖」からであったと主張する。1934年の英国スピナーランド法の改正によって救貧法が改悪された事実が全てを物語っている。ポランニーの著書『大転換』の訳者である野口建彦は、ポランニーは「19世紀の自己調整的市場経済が一見拡大するかのように見えるものの、裏面では労働や土地を擬制商品として取り込み、本来の市場が崩壊していく過程を描いてみせた。」¹⁾と説明している。

ポランニーの歴史性の読み込み——ここでは経済人類学ではなく比較経済の中から派生しているが——特に19世紀の自己調整市場が欧州で成

立していく過程を懐疑的な姿勢で考察したところに意義がある。ポランニーがヨーロッパ世界の中心でなく周縁であるハンガリーに誕生したからこそ出来た発想である。

B. 互酬性、再配分、交換

ポランニーは、互酬性、再配分、交換の3つを経済の統合形態として掲げる。近代経済学者が全ての事象を交換の形態により解明するのに対し、ポランニーは経済史家として交換が経済の取引様態として発現したのではない、と主張する。

i. 互酬性 (reciprocity)

互酬性とは、古典的命題ではあるが現代においても十分通用する命題である。トゥルンヴァルト、マリノフスキー、そしてマルセル・モースまで古典といわれながらも、1987年ブタペストにて開催されたポランニー学会では、互酬生の再評価が採り上げられるなど、強い現代性を帯びている。

互酬性とは、基本的には対集団の行為である。狭義の経済学においては、個人レベルでの行為の集合として経済行為がとらえられるが、互酬性は、この種の方法では解明できない。フォーマリストは、贈与は交換の一形態と規定するが、これでは互酬の中の贈与にどのような集団の制度的背景が内包しているかを解明できない。アトムとして経済実体の個をとらえることでは贈与は見えてこない。互酬を実在的に探求していけば、そこにはおのずと慣習、法、宗教などの非経済的要因に起因した集団間を対称的に移動する姿が見えてくる。

ii. 再配分 (redistribution)

互酬性が対称的な集団間に発現する行為であることに対し、再配分は、集団内の行為である。再配分はある集団内の物の垂直的移動である。互酬は水平的移動であるが、再配分は互酬の一変型であることも考えられるが、指揮権のある中心が存在するのが再配分の特徴である。

iii. 交換 (exchange)

ポランニーは交換を、操作的交換、確定的交換、統合的交換の3形態に分類した。ここで彼は確定的交換と統合的交換の違いを主張し「利得」の規定の曖昧さを提示した。つまり、ポランニーは、アダム・スミス以来、人間は常に極大化のために交換を行うとする大前提を否定した。フォーマリストの前提は、未開社会や古代社会を含めて全ての社会において、人々は交換性向を持ち、その動機は自らの利益獲得のためというものである。ポランニーは、交換が単独で現われたものでもなく、互酬や再配分が段階的に発展して交換に至るものではないことを明らかにした。

2. マルセル・モース

モースは『贈与論』で、何が贈与を行わしめて、贈与における互酬性とは何かを体系づけて説明した。

A. 贈与の3つの義務：提供、受容、返礼

モースは贈与における3つの義務を提示した。第1の義務は、贈与は与え手の権威を象徴する。惜しみなく与えることは提供者の名誉を具現する。極限では破滅型の消費——ポトラッチとして発現する。

第2の義務は贈り物の受容であり、贈り物の受領拒否は与え手と受け手の友好的関係の決裂を意味する。贈与の受容の義務には2つの意味がある。1つは与え手に同等なものを返礼することが不可能な場合、受容を拒否するもので、この時点で受け手の尊厳は著しく損なわれる。もう1つは、与え手と受け手の友好関係の拒絶で、戦争状態の突入を意味する。

第3の義務は贈り物の返礼である。返礼とは受け手の権威、体面の保持から生まれる行為である。後段で説明するが、贈り物にはある種の危険性が内在している。モースは、それを“物の霊”(the spirit of thing)として説明する。

B. ハウ・マナ・タオンガ

マオリ族²⁾は贈り物に霊が宿ると信じる。ハウ (hau) とは物の霊であり、マナ (mana) とはハウの魔術的、宗教的、精神的な力である。タオンガ (taonga) とは受け手が贈り物を受けとったままで返礼を行わないと、その受け手を殺すような力を指す。モースによれば、タオンガは個人、氏族、土地と密接に結びついている。マオリ族における贈与は、純粹に経済的動機から行っているのではなく、宗教的な聖なる土地とマオリ族の結びつきから端を発している。ここでも西洋における二元論の罠に陥ることなく、聖俗の境目を外すことがザカートの新たな理解につながる。

C. 『贈与論』 への批判

モースの『贈与論』は、アニミスティックであるとの批評は、主として西洋の聖俗二元論から出発していると言えよう。しかし、未開社会、古代社会に限らず現代社会においても、ある種の霊の存在は、拡大解釈して記号論的な意味からも否定できない。筆者は、マナが単純に宗教的、呪術的意味からのみ派生したのではなく、倫理的、道徳的な要素も複合的に絡み合い義務的な贈与がとり行われたと考える。

3. マーシャル・サーリンズ

サーリンズは『石器時代の経済学』でモースの『贈与論』にある曇りを鋭く看破した。それはハウについての解釈である。モースがハウを霊的なものとするのに対し、サーリンズは、霊的、物質的と区別できないと主張する。サーリンズはハウを、宗教的、経済的、政治的要素が入り込んだものと考えた。

さらに、モースがハウを霊的なものと考えたのに対し、サーリンズは「豊饒力」「生産力」(excess) としてとらえた。これは「財産」または「役得」を意味し、イスラームの所有権に関する倫理規定と背景を同じくする。イ

スラームでは過度の富の所有もしくは保有は望ましくない。Ribā (利子) の禁止も、富の過度の保有による富の退蔵の禁止であり時を超え富が自己増殖的に拡大することを禁じる経済倫理である。サーリンズの「富を自分の手許におくことは非道徳的」⁹⁾とする説明は整合性を持つ。

A. 共同寄託

ポランニーは、互酬性、再配分、交換の3つの統合体系を規定し、モースは、互酬性に着目し『贈与論』を完成した。サーリンズは再配分に光をあて「共同寄託」として新たに規定した。基本的に共同寄託は“集団内”の共同行為であり、互酬は“集団間”の行為である。

共同寄託における“centricity” “collectivity”といった物の移動は、真にウナムにおけるザカートの動きである。共同寄託は、集団の維持、共同体の利益に帰依する。

II. ザカート

ザカート (zakāt) は、アラビア語の動詞 zakā (成長する、心の中で純化する) からの派生語で、英訳では almsgiving, alms, almstax, charity, wealth tax の訳語が当てられている。すでに、訳語 almstax の中に、フォーマリズムの萌芽が見られる。alms は、喜捨、布施との邦訳が妥当と思われるが、この喜捨と税の複合語で「宗教税」という形の訳語が散見される。ザカートがムスリムの義務であるというところから、徴税の持つ強制力との相似性を強調したものに他ならない。フォーマリストの巧妙な置換えの調理である。著者は、英訳としてはザカートを贈与と考え“almsgiving”が適切と考える。

語の意味「純化」「成長」からも明らかなように、zakāt は、ムスリムが

あえて、自分の財産の一部を貧者に与えることによって、富に対する執着心を昇華させる。そして鉢木の葉を摘んで、全体の木成長を促すように、ザカートも、ムスリムが自分の財産を切りとることによって、財産を「成長」させる。

邦訳については、「喜捨」が一般的ではあるが、「浄財」のニュアンスも含まれている。日本語での用法は、浄化された財つまり仏に捧げるにふさわしい清らかなものであるが、イスラームの場合の「浄財」は、ザカートを与えることによって、与え手の気持ちを「純化」させる意味である。

1. 五行における位置づけ

五行は、信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼を指し、ムスリムが行うべき5つの「務め」である。五行を行う各個人の営みが、総和としては社会的行為を意味することが重要である。

礼拝 (salāt) とザカートは、強い関係性を示している。礼拝が「モスク内」で行うムスリムの務めであるのに対し、ザカートは「モスク外」で行う務めである。別の意味では、礼拝が身体の義務であり、ザカートは財産の義務である。

断食 (sawn) もザカートと相関関係を持つ。その関係は3つに大別される。第1は、アッラー (神) の前での辛苦の経験である。ラマダーンの月に、断食をすることは、身体の純化を意味する。同様にザカートは財産の純化である。また、断食を行うことは、空腹の痛みを貧者と共有することであり、ザカートは一定の財産を貧者に与えることで、日頃貧者が感じている痛みを共有することにある。

第2に、ザカートも断食もウンマの純一を促す意味で重要である。困難な行をムスリム全員が同時に共有することによって、ある種の連帯感を養うものである。

第3には、ラマダーンの月には、別種のザカート (ザカート・アル=フ

イトル zakāt al-Fiṭr) をとり行うのである。

信仰告白 (shahāda) とザカートにも、関係性が存在する。信仰告白は、外に内に、すなわち言明する場合と心の中の場合と、2つ行ってこそ意義がある。この内と外の二面性は、ザカートにも適合する。外面的には、実際目に見える形での行為であり、内面的には、精神的な純化の意味である。

このように、ザカートは他の五行の4要素と深く関係性を持ち、ザカートを単独で論ずることは、その社会的、宗教的背景を無視することになる。

2. ザカートの贈与者

ザカートの与え手は、下記の条件で規定される。

- i. ムスリムであること。
- ii. 必要最低限の資産 (nisāb) を保有していること。
- iii. Nisāb を超える財を1年以上保有していること。
- iv. 負債を負っていないこと。
- v. 精神異常でないこと。
- vi. 成人であること。

<与え手の3つの義務>

i. 匿名性

ザカートは本来、匿名でとり行われるべきものである。もし、ザカートが直接、与え手 (giver) から受け手 (recipient) に渡った場合には、そこで受け手は、寄贈者に何らかの「負いめ」「義務」を感じる。実際には、与え手と受け手との間には、zakāt officials ('amil) と呼ばれる官吏が介在する。この官吏は、受け手が直接負い目を感じないように機能している。

ザカートを一種の贈与と規定するならば、ザカートも贈与の持つ互酬性、ある種の危険性を内包している。事実、ザカートの受け手は、贈与の返礼を贈り手に行うことは難しい。なぜなら、ザカートを返礼するほど裕福で

はないからである。返礼が不可能である場合、贈与の受け手の尊厳は著しく損なわれるのである。このような事態を回避しているのは、zakāt officials の存在である。贈与に伴う返礼の呪縛から受け手を解放している。受け手の名前は、zakāt officials が知るものであり、一般のムスリムは、知ることができない。それ故に、受け手は贈与の負い目から解き放される。

ii. “おごりたかぶることなく”

イスラームにおいては、経済的優位性がそのまま、神の前での優位性を意味しない。富者であっても貧者であっても、神の前では平等である。ザカートの与え手が、受け手に対して感謝、称賛、尊敬などを強要するのは、与え手のおごりである。なぜならば、受益者の威厳を傷つけるからである。これは真に、モースが考察した、タオンガの存在に他ならない。マオリ族では贈り物を受けとってそのままにしておくことは、タオンガがその受け手を殺すことを意味するからである。

この与え手の義務は、与え手に一定のたがをはめることによって、与え手の優位性を消し去る効果を持っている。むしろ、これは贈与の持つ「毒」への毒消しである。

iii. 義務としてのザカート

ガゼリーは、ザカートを義務として位置づけている。しかし、筆者は、むしろ五行の中で位置づけとして、また、サダカ (sadaqah, voluntary almsgiving) との対比でのみ、義務を強調すべきであると考えている。ムスリムが義務感からのみ、ザカートを供出しているのだろうか？ むしろ、貧者と富者がウンマ (ムスリム共同体) の中で、社会連帯を醸し出す中でザカートシステムが機能していく。

ザカートの強要は、ムハンマドの死後、メディナにおいて、急激な人口増加に伴う財政難により、第1代正統カリフ、アブー・バクルが履行したことによる。これが、オリエンタリストの「宗教税」の定義となっている。

ザカートを贈与としてとらえるならば、「何が贈与を行わしめるか」が問

題である。贈与を行わしめるものは、基本的にはイスラームにおける所有権に寄因する。ウンマ（共同体）の富は、富者と貧者の共有であり、ムスリムは用益権を与えられているにすぎない。ザカートは富が自己増殖することを防止、浄化を行うのである。

3. ザカートの受領者

1) 受領者の8つのグループ⁴⁾

- ①貧者 (faqīr) —— 貧者とは不具の者、孤児など、財産がなく、日々の生活の糧をかせぐことが困難な者。
- ②生活困窮者 (miskin) —— 1,000 ディルハム以下の財産所有者。
- ③ザカートを取り扱う者 ('āmil) —— ザカートの収受に関わる人々は、アッラーの道に働く人としてザカートが与えられる。
- ④イスラームへの改宗者 (al-ma'lafah qulūbahum)。
 - a. ザカートによって改宗が期待できる者。贈与により積極的改宗を狙った者。
 - b. 改宗したものの依然として気持がゆらいでいる者。
 - c. 改宗への見込みのある者
- ⑤ジハード (jihād) を行う者 (fi sabilillah) —— 神の道に努力する人、戦士。
- ⑥旅人 (ibn al-sabīl) —— イブン・バットウタが、30年間エジプト、中国、マレーシア、アフリカまで継続的に旅行ができたのはザカートに負うところが大きい。

2) 受領者の義務

① 神の裁定を知れ

ザカートの受領者は、2つの重荷を背負っている。それは貧者としての重荷、そしてザカートの受領時の負い目である。ザカートは贈与であるが

故に、受け手である貧者は返礼即ち贈与を返すことが難しい。これを、アッラー（神）の裁定によるものとし、返礼できないことによる呪縛から解放する。これは贈与における与え手と受け手の相互性を神の介在により、神と与え手、神と受け手の2つの関係に置き換えることを意味する。履行面では、ザカートの与え手と受け手の間に、zakāt officialsが介在することとなる。

② 神に感謝せよ

アッラーの前では全てのムスリムは平等である。にも拘わらずザカートの受領者は、ザカートの与え手に、返礼が難しいが故に負い目を感じる。そして受領者は与え手に一種の従属関係を感じる危険性がある。この贈与からくる示威性に対し、与え手ではなくアッラーに感謝することによりその示威性を柔らげ、ウンマにおける社会連帯を助成するのである。

III. ザカートのダイコンストラクション

1. 社会連帯

L. デュギイの主張する社会連帯はザカート理解の一助となる。デュギイの「社会連帯」はデュルケムの流れをくみ、デュルケムの甥であるモースの『贈与論』における全対的社会給付システムともある種の共通点を持つ。ザカートとは文字通り喜捨により「純化」を行うことである。純化はウンマにおけるムスリムの社会連帯を強化する。

2. 互酬性

ザカートとは神への感謝である。ザカートの与え手は、見返りを期待してはならない。ムスリムは神への1年間の感謝としてザカートを支払う。積極的な意味で来世への期待を具現化したものである。

サーリンズは未開社会では「財を保有することが不道德」と規定する。理論的にはイスラーム社会においては所有権はウンマにありムスリムは用役権を持つに過ぎない。ムスリムは貧者と共にウンマの中で富や財を共用している訳である。前段で述べたようにサーリンズの excess は真にイスラームにおける利子の禁止であり富や財の退蔵の禁止を意味する。ザカートを行うことで富の保有の負い目を純化する。贈与者を苦しめる「タオンガ」をとり払うものである。

贈与は受け手にも危険を与える。それは贈与の受け手は与え手に返礼を行わない限り負い目を感じる。ここにザカートの匿名性の長が生きてくる。実際にザカートは与え手から受け手に直接移動せず、間に zakāt officials が介在する。イスラームにおいてザカートの受け取り手は神に感謝せよとある。このことは、受け手が感じる贈与の返礼の呪縛から受け手を解放するものである。

3. 共同体の富（共同寄託）

これら3つの key concept はザカートがイスラーム社会においてどのように機能しているかを明らかにする。

ザカートとはウンマの基金である

ウンマとは、国家といった概念でなく、ムスリムの集合体としての「共同体」である。ザカートは「共同体の富」として「社会連帯」の基礎をつくる。その意味では基金として真に ummah の意味「礎」に相通じる。

イスラームにおいて所有権は第一義的にはウンマにあり、ザカートも共同体の富として位置づけられる。ウンマは、「均衡」「統一」そして「社会連帯」を志向する。「均衡」とは「富の均衡化」でありウンマの社会的調和に貢献する。これは「水平的均衡」を意味する。「統一」はザカートの「再配分」「共同寄託」における「中心性」に呼応し、垂直的均衡としてウンマの中心にムスリムを求心する。ウンマの求心性は「社会連帯」を形成する。

ザカートはウンマの基金として再配分され、タウヒード (Tawhīd, 一化の精神) によりウンマの統一に貢献する。

結 語

ザカートのディスコントラクションは「等身大」のザカートを見ることから始まった。本論ではザカートを等身大で語ってきた。それはザカートを贈与の行為としてとらえたことである。交換の枠組みでなく、ザカートを与えるという行為をその間々に光をあててみた。その間には離床した経済を社会に埋め戻す作業を行った。

ザカートを贈与と見ることで、互酬性、共同寄託、社会連帯としてのザカート—— community fund の姿が浮かび上がる。

注

- 1) 野口建彦「市場社会を超えて」『中東フォーラム・Maydan』第12号、国際大学中東研究所、1987年、1頁。
- 2) ポリネシア系ニュージンドの原住民の総称。
- 3) Marshall Sahlins, *Stone Age Economics*, London, Tavistock Publications, 1974, p. 149.
- 4) Yūsuf al-Qardāwī, *Fiqh al-Zakāh*, Beirut, Mu'assasah al-Risalah, 1985 (15th Print), pp. 544-744.

Zakāt in “Deconstruction”

by Hideki SATO

Zakāt has been analyzed as one of wealth tax in market economics. The author argues with this existing premise where by market economists stress the similarity to income tax. However, he analyzes the *Zakāt* as almsgiving in the term of gift-giving using the methodologies of Marcel Mauss, Marshal Sahlins and the economic-anthropology of Karl Polanyi.

Zakāt promotes social collaboration as a community fund. *Zakāt* is circulated in the circle like “Kura.” In the process *Zakāt* is circulated as a community fund, it prevents recipients from obligation to repay when they receive *Zakāt* because of anonymous givers.

Zakāt is a community fund which is one transformation of Muslims’ wealth for Ummah-Muslims’ community. It is circulated in Ummah beyond time and location in order to promote tie-up Muslims.

Zakāt is a gift-giving which moves from givers to recipients. It moves among Muslims, givers pay *Zakāt* to Mosque or *Zakāt* officials and then it is given to recipients. This means that recipients should not feel any obligation to repay *Zakāt*.

Zakāt promotes unity of Ummah and social collaboration of

Muslims. Through the distribution of *Zakāt* in Ummah, Muslims feel a tighter brotherhood as a gratitude to Allah-God.

Zakāt is reciprocal movement. Givers pay it as they feel gratitude to God and recipients are given *Zakāt* as they should not feel inferior, because they actually cannot repay *Zakāt*. Recipients, however, feel gratitude not to the givers, but to God.

In short, while *Zakāt* is one transformation of wealth tax, the author insists *Zakāt* is a community fund which promotes social collaboration in Ummah and the enlargement of Ummah from the view of gift-giving and economic-anthropology.